沼津市
明治史料館通信

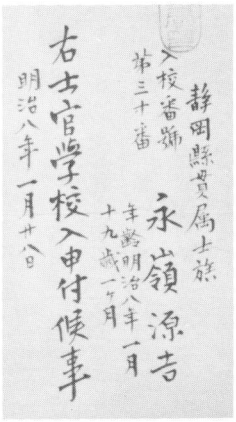
Vol.3 No.4 通巻12号

シリーズ 沼津兵学校とその人材 ⑪

沼津兵学校生徒の進学先

沼津兵学校はわずか三年半の短命だったため、そこに学んでいた生徒たちは、兵学校での教育が完結しないまま廃校を迎えることになった。学校の東京移転に最後まで付き合った生徒六十四名は、そのまま陸軍教導団に編入されたが、それ以外の百数十名の生徒たちは、就職するかもしくは新たに別の学校に進学するかという選択を迫られたわけである。それは、附属小学校に学んでいた者にとっても同様であり、兵学校なきあと、進学先を他に求めることになった。

下に掲げた表が、その後の兵学校・附属小学校生徒の進学先を示したもの



▶陸軍士官学校第1期生の入学辞令
永嶺源吉は、沼津兵学校第9期資業生から陸士に進み、砲兵大佐となった。
（川崎市　永嶺年子氏所蔵）

である（最終学歴・陸軍大学校は士官学校に含む）。これは、あくまで経歴の判明した者のみの数字であるが、大よその傾向を知ることは可能だろう。

まず、兵学校出身者が教導団や士官学校に集中しているのに対し、附属小出身者にはそのような片寄りがない。陸軍幼年学校とは違う、沼津兵学校附属小学校の普通教育機関としての性格が反映されているものと考えられる。

陸軍以外では、東京大学と工部大学校に進学した者が目立つ。この中からは、三人の医学博士（榊俶・榊順次郎・荻生録造）と五人の工学博士（石橋絢彦・新家孝正・真野文二・田辺朔郎・小田川全之）が出た。彼らこそ、軍人以外では最も世間的栄誉に浴した者であり、まさにエリートであった。

次に、沼津兵学校時代の教授を慕って、そのもとに馳せ参じたという例もある。西周の育英舎、赤松則良の海軍兵学寮、乙骨太郎乙の大蔵省翻訳局（英学校）、大築尚志の砲兵本廠生徒学舎、杉亨二の共立統計学校などである。

勿論、附属小学校出身者の中には、その後身である集成舎変則科や沼津中学校に継続して学んだ者もいた。

こうして兵学校出身者たちは、新たな進学先において、沼津では中途に終った勉学を継続させ、より高い知識・技術を身に付けていったのである。

しかし、その一方で、沼津兵学校を最終学歴とした者の中にも、英学者永峰秀樹、数学者荒川重平・中川将行、論理学者清野勉といった優れた人々がいたことを忘れてはならない。

進学先＼出身校	兵学校	附属小
陸軍教導団	58	1
陸軍士官学校	20	8
海軍兵学校	3	3
東京大学	4	7
工部大学校	4	3
駒場農学校	—	1
札幌農学校	—	3
司法省法学校	1	—
大蔵省翻訳局	3	—
陸軍病院	6	—
砲兵本廠生徒学舎	—	1
共立統計学校	1	—
東京商法講習所	1	1
慶応義塾	1	4
同人社	—	2
育英舎	1	—
苟新館	2	—
順天求合社	1	—
築地大学校	—	1
集成舎・沼津中学校	—	5
韮山講習所	—	1

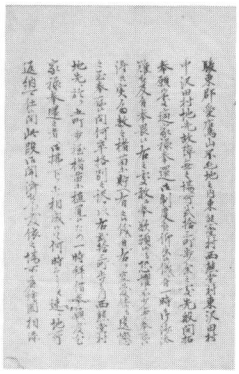
沼津兵学校生徒の進学先一覧
判明者のみ。この他に、就職した者や経歴不明の者が100名以上いる。

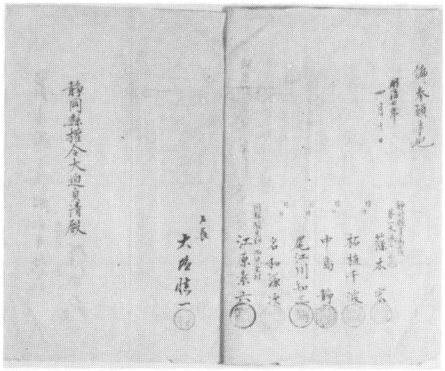
江原素六とその周辺〈7〉

「富陽製紙会社」設立計画

明治初年、江原素六はさまざまな事業を手掛けて士族授産をはかったが、楮（こうぞ）・三椏（みつまた）を栽倍し、製紙業にも手をのばそうとした。

左の写真は、明治七年（一八七四）に江原をはじめとする沼津移住の旧幕臣六名が県令あてに提出した、楮苗栽培のための土地拝借願書である（江原素六文書）。この願いは聞き届けられ、江原らは西熊堂村地先の愛鷹山不毛地五町歩を開拓して楮の苗圃をつくった。しかしその後士族たちによる楮・三椏栽培はそれほど発展しなかったようである。





その後明治十年代に入り、地域民衆による殖産興業が活発化する中で、江原はより大規模な製紙業に関係することとなる。すなわち明治十六年（一八八三）の富陽製紙会社設立計画がそれである。

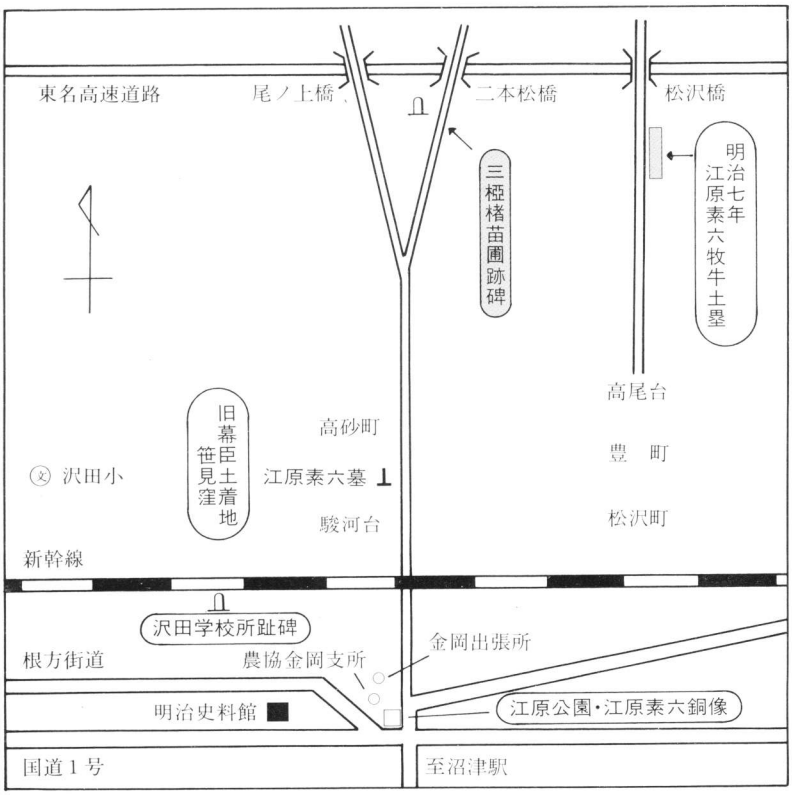
管見では、その年一月に江原が製紙場問題の件で吉原へ赴いたという日記の記述が初見である。[1] 二月には新聞報道によりその計画が公にされる。記事によると、この製紙会社は社名を富陽製紙会社といい、本店は東京に置き、工場と支店を沼津の狩野川岸に置くという。発起人は、村田一郎・林徳左衛門・朝比奈英太郎・喜多川清左衛門・河瀬秀治ら東京の実業家五名と、富士郡の渡辺登三郎・松永安彦・池谷繁太郎および江原素六ら地元有志である。資本金は十二万円で、うち四万五千円は東京の五名が出資し、一万五千円を東京で株主募集、そして残り六万円を地元の株主から集めるという。[2] また、十五歳から二十歳前後の者五・六名を募集し、神戸の製紙社へ抄紙伝習のために派遣するとのことも報じられている。[3]

東京での株主募集は順調だったらしく、安田善次郎・大倉喜八郎といった巨商のほか、旧沼津藩主水野氏なども応じている。[4] しかし、沼津の工場に設置する予定だった抄紙器械が東京で一部焼失するという事故も起き、[5] また、まだ用地も確定していなかったらしく、地元では開業の準備がなかなかはかどらなかったようだ。

四月二日には、農商務大書記官奈良原繁・同御用係南一郎平が来沼し、江原素六・河瀬秀治・静岡県大書記官水峰弥吉・駿東郡長窪田凸・上香貫村戸長石橋忠規らの案内で、狩野川岸の工場建設予定地を視察した。[6] 上香貫村の戸長が同行していることから、建設予定地が沼津町とは対岸の場所であったことがわかる。[7] 五月には、内務省土木局御用掛山田寅吉が同地を訪れ、工場の水車を運転するための適否を検査した。[8]

ところが、その後一転して工場建設地は、富士郡原田村に変更されるのである。その理由は、狩野川に海水が逆流することが不適格だったためらしく、[9] また工場建設に際し地価が高騰したため、用地買収ができなくなってしまったためもある。[10] 江原は、日記によると五月下旬から六月にかけて、原田村へ行ったり、林徳左衛門とともに静岡へ赴いたり、来沼した県令に対し製紙会社の件で有志者への説諭を依頼したり、といった具合に奔走している。しかし、松方デフレによる不景気のため、原田村への工場建設もまたまた延期され、[11] 富陽製紙会社設立計画は立ち消えとなったのである。

そして、富陽製紙会社の衣鉢を受け継ぎ、資本金二十五万円の「富士製紙会社」が設立されたのは明



昭和62年　(社)江原素六先生顕彰会が建立した「三極楮苗圃跡」碑位置は西熊堂字二本松、すなわち江原らが明治7年の願書により借り受けた場所である。(地図参照)東名高速道路にかかる二本松橋のたもとに立つ。地元の人々は、このあたりを「みつばたけ」と通称する。

治二十年（一八八七）であった。[12] この会社の発起人には、前と同様河瀬・村田・林らが名を連ねていたが、江原はもう関係していない。富士製紙はその後大きく発展し、現在の富士市に大製紙業地帯を形成する中核となったのである。

明治十六年当時、江原は積信社による製茶輸出事業の失敗の後始末に追われていたが、製茶から製紙に乗り換えようとしたのかもしれない。[13] 富陽製紙会社の東京側の中心人物である河瀬秀治は、もと内務官僚で当時中央茶業組合長でもあり、江原とは関係が深かったらしい。[14] しかし、この計画に関しては、地元側の中心はあくまで富士郡の人々であり、沼津からは責極的に呼応しようという人物は出現しなかった。『沼津新聞』には、沼津に工場が建てられるというのに、それに協力しようという者がいないのは、「沼津人民ノ無気力」に他ならない、という投書が寄せられている。[15] 江原の折角の人脈も生かされなかったということだろうか。

注

(1) 「江原素六日記」明治十六年一月二十六日)。
(2) 『沼津新聞』明治十六年二月一日。
(3) 同前、同年二月四日。
(4) 同前、同年三月二十五・二十八日。
(5) 同前、同年三月四日。
(6) 同前、同年四月四日。
(7) 沼津市住吉町柳下菊男氏の談話によると、氏の祖父鐐三郎はこの製紙会社設立に協力したそうで、その場所は玉造神社周辺だったという。
(8) 『函右日報』同年五月八日。
(9) 『鷹岡町史』九三三頁。
(10) 『函右日報』同年六月二十六日。
(11) 『静岡大務新聞』明治十八年九月十九日。
(12) 『吉原市史』中巻四九八頁。
(13) 積信社を通じて結びついた三井物産の馬越恭平からは、三極の買売についての手紙も来ている（江原素六文書）。
(14) 製紙業に関し、河瀬が江原にあてた手紙三通が残る（同前）。
(15) 『沼津新聞』明治十六年二月十日。

お知らせ欄

◎冬の講演会開催のお知らせ

冬の講演会をつぎのとおり予定しています。お誘いあわせてご来館下さい。

とき：2月28日(日)
　　午後2時から4時
ところ：明治史料館　講座室
講　師：高橋省吾
　　（明治史料館嘱託）
テーマ：「明治時代の根方の村々
　　～区有文書から～」

◎「沼津絵はがき」展開催中

明治から昭和にかけて沼津で発行された絵はがきを集めて「沼津絵はがき展」を昨年12月20日から4階展示室で開催しています。保養地や観光地として首都圏から入気を集めたころの沼津を絵はがきを通してふりかえってみましょう。

明治22年に東海道線沼津駅が開設されたことにより、沼津は東京からの交通が便利となり、沼津御用邸の造営などによって、気候温暖で風光明眉なこの地が、保養地として知られるようになりました。

保養地沼津の象徴のひとつ千本松原は、明治40年にそれまでの自然林に沼津町が手を加え「沼津公園」を開設、昭和2年には東日・大毎新聞社主催の日本新八景の選定で全国11位に投票され、その海浜は牛臥、静浦、三津浜などとともに海水浴場としてにぎわいました。

こうした中で、沼津の観光資源を宣伝するため、さかんに絵はがきが発行されたようです。また、風景ばかりでなく、沼津町の町並みや大正時代の大火、製糸工場開設の記念はがきなどバラエティに富んだものがあり、貴重な写真資料となっています。

「沼津絵はがき」展から

展示会は、館蔵資料をはじめ市民の所蔵家などの絵はがき三百点余りを展示して、2月28日まで開催しています。（月曜日および1月30日は休館）。

◎続けてお読みになりませんか？

「明治史料館通信」は市役所玄関や各地区の市民窓口事務所の窓口にもありますが、郵送をご希望の方は、住所、氏名、電話番号明記の上、2年間の郵送料として六〇円切手8枚を同封し、当館あて封書でお申込み下さい。

◎既刊刊行図書案内

明治史料館がこれまでに刊行し、領布している図書はつぎのとおりです。郵送にて領布ご希望の方は、書名、送付先、氏名および電話番号明記のうえ、領価に送料を加えた金額を、郵便局の定額小為替または普通為替に換えて同封してお申込み下さい。

●「沼津案内（復刻）」
四六判（B6判）　三六頁
頒価二〇〇円（〒一二〇円）

●「沼津之栞（復刻）」
一一×一八センチ判　一二四頁
頒価三〇〇円（〒二〇〇円）

●「江原素六旧蔵明治大正名士書簡集」
A4判　六三頁
頒価七〇〇円（〒二五〇円）

●「江原素六関係史料目録」
B5判　三〇九頁
頒価二、〇〇〇円（〒三〇〇円）

●「沼津兵学校」
B5判　六七頁
頒価一、二〇〇円（〒二〇〇円）

●図録「浮世絵に描かれた沼津」
B5判　二四頁　図版カラー
頒価九〇〇円（〒一七〇円）

●「沼津市博物館紀要10」
B5判　一六八頁
頒価二、〇〇〇円（〒二五〇円）

●「沼津市博物館紀要11」
B5判　一一八頁
頒価一、五〇〇円（〒二五〇円）

沼津市明治史料館通信　第12号
編集
発行　沼津市明治史料館
〒410 沼津市西熊堂272－1
☎〇五五九(23)三三三五